「資本主義の基本的矛盾」についての簡單な考察

山本二三丸

はしがき
第一節　わが国における従来の諸『定式化』または『解釈』
第二節　藤塚氏の「反デューリング論」による『説明』（以上本号所載）
第三節　「基本的矛盾」の内容の考察
(1)　エンゲルスの説明
(2)　「生産の社会的性質」
(3)　「領有の私的性質」および「資本主義的領有」
(4)　「基本的矛盾」の意義
結び

はしがき

「資本主義の基本的矛盾」という言葉は、これまで恐慌を論ずるさいに好んで用いられてきたものであるが、とりわけ最近では、この言葉を挿入しないと資本主義経済を論ずる経済論文たる資格がないというほどに、ほとんどの経済論文がこの言葉を援用したり、挿入したりしている。だが、それにもかかわらず、この言葉の意味を掘り下げ、その内容を厳密に把握しようとするこころみは、きわめて稀であった。とくに、「資本論」の内容をあげつらうことを得意とする『専門家』のあいだで、このあまりにも有名な「資本主義の基本的矛盾」をば「資本論」の内容と正しく結びつけて説明しようとするこころみがまったく見られなかったということは、まことに特徴的といわなければならない。わたくしは、これまで発表してきた恐慌にかんする諸労作の中で、くりかえし、恐慌の必然性をば「資本主義の基本的矛盾」の「展開」によって説明すべきであると主張してきたのであるが、もちろん、このような主張を表明するにあたっては、「資本主義の基本的矛盾」の内容そのものについての究明がこれに先行しなければならなかった。「当らずといえども遠からず」式の、いわば、まぐれ当り式に、有名な「資本主義の基本的矛盾」というお題目を――レーニンの言葉そのままをうのみにして――掲げておきさえすれば、それで「恐慌の必然性」の論証は充分であるといったような杜撰な考え方をもってしては、「恐慌の必然性」を「資本主義の基本的矛盾」の「展開」によって説明すべきであるという主張は成り立ちえないのである。したがって、わたくしとしては、「資本主義の基本的矛盾」そのものを説明することを自分の課題とすることはまったく念頭になく、「恐慌の必然性」を説明することを主眼としてそのために「資本主義の基本的矛盾」の「展開」を追究すること、したがってまた「資本主義の基本的矛盾」その

ものの説明も同時に含みおこなわれるべきことをひとつの副次的な課題として提起するにとどめていたものである。あまりにも有名な「資本主義の基本的矛盾」について、いまさら解釈を述べ立てるまでのこともない、というのが、「基本的矛盾」そのものを論ずることをさしひかえさせた理由の一半でもあった。

ところが、最近、藤塚知義氏が発表された論文――「いわゆる「資本主義の基本的矛盾」と「最大限利潤の法則」――史的唯物論との関連に視点をおいて――」(「経済評論」一九五四年十月号所載)――は、「「生産の社会的性質と領有の私的(資本主義的)性質との間の矛盾」という・いわゆる「資本主義の基本的矛盾」なる周知の命題は、恐慌の必然性の根拠として多くの論者によって援用されるところであるが、この基本的矛盾がどういう内容のものであるか・それが『資本論』の全体の論理(註)とどういう関連をもつのか・という大切な問題が、ほとんどの場合十分説明されていないようである」という言葉をその冒頭にかかげ、これによって、「資本主義の基本的矛盾」についての究明がまったく「不十分」であったことを確言すると同時に、当の論文が、この「十分説明されていない」問題の解明をはじめて与えようとするものであることを明示されたものである。この、藤塚氏の最近の労作によっても、「資本主義の基本的矛盾」についての究明が――これまで公表されたかぎりでは――依然として旧来と同じような状態にあることを教えられるのであるが、他方、このようなわが経済理論界の「現状認識」の上に立ってものされた当の藤塚氏の労作についてみるとき、やはり、きわめて本質的な問題が少なからず含まれているように考えられるのである。

(註) 藤塚氏は、右の論文の中で――またその他の諸労作の中でも――いたるところで、「『資本論』の論理」という言葉をくりかえしていられるが、この種の言葉ほど、藤塚氏の所論の『論理』的誤謬を端的に示しているものはないのである。「資本論」の中に展開されているのは理論であって論理ではない。論理はたんに理論的展開のためのひとつの――いわば「形式的な」――要件にすぎないのである。たとえば、「この資本主義的生産の「即自」としての商品の論理の発展が資本主義の諸範疇を展

開してゆくのである」（藤塚氏論文、「恐慌論と利潤率低下法則――資本論の体系と恐慌の論理――」「経済研究」第三巻第一号、三五ページ、傍点―山本）という言葉のごとき。「資本論」冒頭の商品は、「資本主義生産の「即自」としての商品」ではない。「資本主義的」という規定をまさに捨象したところの、私的所有一般をあらわす商品にほかならぬ。右の藤塚氏の言葉は、「資本論」の理論をわきまえない『論理的駄弁』にすぎない。あるいはまた、つぎのごとき、藤塚氏の『主張』にも、右の『論理』的錯誤は判然と示されている。

「社会的生産と資本主義的領有との間のこの**いわゆる**「基本的矛盾」は、かくて「商品」に即自的に（an sich）含まれる労働の二重性、社会的分業（「資本論」一巻一章二節）とこれが資本の直接的生産過程において最深最奥の基礎を獲得する相対的剰余価値の生産、協業・工場内分業、そして資本蓄積法則（一巻四篇、七篇）とを貫く「内容規定」に外ならないのである。しかし、この矛盾の現実的発展は、資本論第三巻における資本の現実的運動の論理をまたなければならないのである」（前出、三七ページ、ゴチック体――藤塚氏、傍点―山本）。

「資本主義の基本的矛盾」は、およそ資本主義的生産関係が現存するところには、現実に存在し、したがって「現実的に発現」しており、資本主義的生産関係の発展とともその発現が展開されるにすぎない。これを「資本論」についてみるとき、「基本的矛盾」は、第一巻第一篇においては『内容規定』になっているどころか、まさに反対である。私的所有一般においては「基本的矛盾」は介在する余地はないのである。また、「基本的矛盾」は「剰余価値の生産」とともに「現実的発現」をとげはじめる。「資本論」についていえば、第一巻第三篇以降は「基本的矛盾」の「現実的発現」の説明とみることができるのであって、とくに、第一巻第七篇は、そのもっとも具体的、現実的説明に充てられているのである。「基本的矛盾の現実的発現は、資本論第三巻における資本の現実的運動の論理をまたなければならない」などというごときは、まったく『論理』的おしゃべりである。また、「これが資本の直接的生産過程において最深最奥の基礎を獲得する相対的剰余価値の生産」という言葉の、「これ」は、いったい、何を指しているのか、また、『最深最奥の基礎』とはそもそも何を意味しうるか。――これらは通常の論理を超えた「論理的」作文にほかならない。このような『論理』的観点にもとづいては「資本論」の理論はとうてい充分正しく把握されないのである。わが国においてこの種の、経済理論ではなくして『経済学の論理』にかぶれた『経済理論家』がいかに多いかということについては、雑誌「経済評論」一九五四年四月号所載の座談会記録「経済学の論理と人間の問題」が恰好の見本を提供しているのである。

そこで、わたくしは、「資本主義の基本的矛盾」の「展開」を主軸として「恐慌の必然性」を説明するにさきだって、「資本主義の基本的矛盾」そのものについて、そのあらましの内容を明らかにしておくことが必要であるとを考えたのである。もちろん「資本主義の基本的矛盾」そのものについても、その全内容を説明しつくすことは容易でないので、ここでは、とりあえず、「基本的矛盾」とは何か、「基本的矛盾」はいかにこれを把えるべきか、という視角から、その根本的意義の輪廓だけを明確にすることをこころみたものである。

考察の順序は、まず、従来わが国でおこなわれてきた「基本的矛盾」についての諸々の『定式化』あるいは、その『解釈』の概観にはじまり、ついで、エンゲルスの「反デューリング論」の中の説明によって「基本的矛盾」の『理解』に到達された藤塚氏の『解釈』が、どれだけ「基本的矛盾」そのものの本質の把握に成功しているか検討したのちに、「基本的矛盾」にかんするわれわれ自身の把握の仕方、その「最深最奥の意義」の考察をおこなう、ということにした。なお、「結び」においては、藤塚氏の右の論文での取扱いにしたがって、「最大限利潤の法則」についての簡単な考察を附け加えることにしたが、これは「基本的矛盾」の「展開」についての、ひとつの、重要な説明として挙げたものにすぎないのである。

第一節　わが国における従來の諸『定式化』または『解釈』

ここであらかじめ注意しておかなければならないことは、わが国では、「資本主義の基本的矛盾」の内容の説明が問題となるより以前に、「基本的矛盾」そのものの『定式化』において幾多の、重大な誤謬ないしは偏向が見られたということである。誤まった『定式化』は、そのままただちに、「基本的矛盾」そのものの内容についての重大な曲

解ないしは歪曲を示すものである。

「資本主義の基本的矛盾」とは、「生産の社会的性質と領有の私的性質との間の矛盾」である。また、これは、「生産の社会的性質と資本主義的領有との間の矛盾」というようにいいあらわすこともできる。だが、ここで注意すべきは、右の二つの「定式化」について、「領有の私的性質」と「資本主義的領有」とを簡単に同一のものと考えてはならないということである。この両者は、「基本的矛盾」の「定式化」において用いられるとき、まったく同一のことを意味するものとなるのであるが、本来、その意味するところはことなっているのである。いずれにせよ、右の二つの「定式化」とことなった『定式化』を採用し、――しかも、上の「定式化」となぜことなった『定式化』を採ったかという、内容上の関連を明示することなしに――『適当な』『説明』を附ぜているものは、そのほとんどが重大な問題を包蔵しているのである。

さきに挙げた藤塚氏の所説からもうかがわれるごとく、「資本主義の基本的矛盾」の内容についてはこれまで「ほとんどの場合十分説明されていない」のであるが、しかし、そのきわめて限られた『説明』の中から、つぎの二つのものを一応区別することができるようである。そのひとつは、「資本主義の基本的矛盾」についての、有名な「反デューリング論」の箇処を注意深く検討せずに、安易につくりあげられた粗雑な『解釈』あるいは『定式化』であり、他は、一応、「反デューリング論」の周知の箇処に論拠を求めて若干の『説明』をこころみようとしたものである。前者の範疇に属する所論は、豊田四郎、川崎巳三郎、宮川実、宮崎犀一の諸氏によって提唱されているものであり、後者に属するものとしては、岡本博之、藤塚知義の両氏の所説が挙げられる。この両種の区分けは、もちろん、明確なものではなく便宜的なものにすぎず、その中間的なものとして、たとえば、長洲一二氏あるいは守屋典郎氏の所論

を挙げることができる。われわれは、第一の範疇に属するものから考察することとし、まず、豊田四郎氏の所論について、大体の趨勢をうかがうことにしよう。

日本経済機構研究所の著わした「経済学の原理」上・中・下三巻は、**豊田四郎氏**のほか、**浅田光輝**、**中村秀一郎**、**茂木六郎**、**遊部久蔵の四氏**の共同執筆に成るものであるが、その内容を、豊田四郎氏著「経済学教程」（青木文庫）と比較することによって、両著とも豊田四郎氏の主張する『理論』によって――とりわけ、かの『有名な』『市場の理論』によって――貫ぬかれていることを知ることができるし、また、豊田氏以外の四氏が豊田氏の所論とほとんど同一見解に立っているものであることが明らかとなるのである。まず、「経済学の原理」の中から、「資本主義の基本的矛盾」にかんする所説を、つぎにかかげてみよう。

〔「第二章第五節　商品生産の根本的矛盾」より〕

(1)　「商品生産は、他人のために、商品世界のために、生産をおこなう。かれは生産手段を所有し、自分の労働力で生産をはじめるのだが、生産の結果である生産物は自己の所有となる。それなのにかれは自己の生産物を自分で消費することはできない。それは、商品社会のために生産されたのだから。このように、たとえば商品としての米が一方において私的所有物でありながら、他方において、商品生産者の労働が、その生産物が、社会的性質をもっていること、これが商品生産に内在する特有な、根本的な矛盾である。商品生産者はこの矛盾を解決するために交換をおこなうのである。

つまり交換とは、生産の社会的性質と私的所有との矛盾を解決するための形式である」（「経済学の原理」上巻、六九―七〇ページ、傍点―山本）。

(2)　「商品生産者が生産手段を所有している結果、自己の労働の生産物を私有する一方、かれの労働――生産物が社会的性質をもっているということ、つまり、商品生産社会における労働の、私的所有と社会的性質との矛盾は、交換によってはじめて解決される」（前出、八一ページ、傍点―豊田氏）。

(3)　「このように、商品・資本主義経済の発展は、それの萌芽形態である単純商品経済から、それの最高の段階である帝国

主義にいたるまで、生産の社会的性質と生産の結果の私的占有との根本矛盾の止揚の形式たるこの価値法則を基礎として行われる」（前出、八七ページ、傍点―山本）。

〔「第五章　資本主義の根本的矛盾」より〕

(4)　「資本主義は、独立的小商品生産者である手工業者および農民を収奪し、かれらの生産手段および生活資料を収奪し、かれらをプロレタリアートに転化し、資本家的工場ではたらくことを余儀なくせしめた。大工業は、この過程を一層おし進めた。これらの工場においては、生産手段は、なによりもまず個々の商品生産者の分散的な私有から大資本家による集中的な私有と化し、労働は賃銀労働となった。

これによって、生産の性質そのものは根本的に変化する。すなわち、小商品生産においては、生産される生産物は個々の生産者の労働生産物である。工場において生産されるところのものは、社会的労働の結果であり、それに参加した労働力全体の生産物である。

かくして生産そのものも、この生産の結果たる生産物も、本質上社会的なものとなる。だが占有の形態は依然として私的である。ここでは生産手段は資本家の独占的所有であり、そのため、多数労働者の労働によって生産された社会的生産物は、資本家の私有財産となり、かれの占有するものとなってしまう。

かかる生産の社会的性質と占有の私的形式との間の矛盾こそ、じつに資本主義そのものの根本的矛盾である」（前出、一八五―一八六ページ、傍点―豊田氏）。

〔「第十二章　実現理論と市場理論」より〕

(5)　「かくて、われわれはこういう結論、商品＝資本主義生産における根本的矛盾、すなわち労働の社会的性質と労働の結果の私的＝資本主義的占有との矛盾は、単純商品生産において発芽し（!?）、資本主義において展開し、激化し、かくて資本主義社会はそれの内在的矛盾の自己運動において、揚棄されるという結論をえたのである」（「経済学の原理」中巻、一六四ページ、傍点および（!?）―山本）。

(6)　「直接的生産過程の一契機としてとらえられた資本蓄積の根本矛盾――労働の社会化と資本主義的所有との矛盾……」（前出、一六四ページ、傍点―山本）。

つぎに、豊田氏の「経済学教程」より、『抜萃』してみよう。

〔「第一章　商品生産と貨幣の役割」より〕

(7)　「さらに、この社会的分業の中では、各生産者は土地や道具や原料などをそれぞれ自分の所有として生産を行う。そのため（!?）生産物は生産者の手に帰する。このように（!?）、社会全体のため、他人のために生産したものが自分のものとなる。矛盾とはかかるものだ（!?）。現実の生活においては、この矛盾は生産者たちの実践を通じて解決されている、すなわち交換によって解決されている」（「経済学教程」二九ページ、傍点および（!?）―山本）。

(8)　「商品生産は、生産手段の私有と社会的分業とを基礎とする。商品生産者＝資本家は社会的分業の一部門を担当する。かれの労働＝生産物（!?）が社会的性質をもっているということ、つまり商品生産における生産の（!?）、私的所有と社会的性質との矛盾は、市場を通じ、すなわち、交換によって解決される」（前出、四〇ページ、傍点―豊田氏、（!?）―山本）

〔「第四章　資本蓄積の一般的法則」より〕

(9)　「……資本主義社会における生産の社会的性質と資本家的所有との根本矛盾……」（前出、一〇四ページ、傍点―山本）。

(10)　「生産力は、かって見ざるほど増大し、これを処理しかねる資本自体の側における資本主義の克服（!?）の結果として生産過程はますます社会化されるという歴史的傾向の下にさらされる。だがそれとともに、生産の社会的性質と、生産の結果の資本家的所有との間の矛盾は、ますます激化する」（前出、一〇六ページ、傍点―豊田氏）。

なお、同じく豊田氏の著書、「日本資本主義構造の理論」の中より、一、二挙げてみよう。

(11)　「マルクスは、商品における二重性が労働の社会的性質と私的占有の矛盾の条件的相対的統一（!?）であり……ことを暴露した」（前出、七ページ、傍点および（!?）―山本）。

(12)　「商品社会の根本矛盾、すなわち、生産の社会的性質と私的所有との矛盾は、資本主義社会において、生産の一層の社会化と資本主義的所有（剰余価値）との矛盾として発展する」（前出、一一七ページ、傍点―山本）。

以上の『抜萃』を一読しただけで、豊田氏（および浅田、中村、茂木、遊部氏ら）による「基本的矛盾」の『定式化』そのものが、いかに混乱したものであるかは、疑う余地がないであろう。

「生産の社会的性質」と並んで、同じ意味をもつものとして、『労働＝生産物の社会的性質』、『労働の社会化』が挙げられており、他方、「領有の私的性質」については、「領有」という言葉はまったく見当らず、これに代るものとして『私的所有』、『私的占有』、『資本主義的所有』、『資本家的所有』、『資本主義的所有（剰余価値）』という、さまざまの意味をもった言葉が無雑作に配置されている。

以上の引用よりして、「基本的矛盾」にかんする豊田氏（および他の四氏）の主張は、つぎのごとく、これを『要約』することができるであろう。

㈠　商品生産には、つねに、生産（労働）＝生産物の社会的性質と私的占有との根本的矛盾が必ず存在する。資本主義的生産においても同じであり、ただ、その矛盾が激化してあらわれる点だけがちがう。（註）

㈡　「生産の社会的性質」とは、生産（したがってまた、労働）が他人のためにおこなわれること、生産物が社会的性質をもっていることであり、「私的所有」＝「私的占有」とは、生産物が商品生産者の所有になることである。

㈢　この「根本的矛盾」は、交換によって解決される。

（註）　ところが、さきの引用(4)の中で、豊田氏は、単純商品生産から資本制商品生産に移るにしたがって、「生産の性質そのものは根本的に変化する」と述べながら、（なんと、結論においては）「かくして生産そのものも、この生産の結果たる生産物も、本質上社会的なものとなる」と結んでいるのである。さきに単純商品生産について、「生産＝労働＝生産物の社会的性質」という言葉を何度もくりかえし聞かされたわれわれは、資本主義的商品生産にいたって、「生産の性質が根本的に変化した」結果、「生産も、生産物も、本質上社会的なものとなる」という言葉で、物の美事に打っちゃりを喰うのである。

右の三箇条の『要約』がわれわれに明確に物語っているのは、「資本主義の基本的矛盾」という言葉が存在していることについては知っているが、その内容については全然知るところがないという「特殊な」組合せであり、かかる場合、唯一の残された方法としては、「資本主義の基本的矛盾」を「商品生産の矛盾」に「解消」させることによって

事態を糊塗すること以外にありえない、ということである。（註）

（註）なお、右のごとき、豊田氏の所論については、とりあえず、つぎの二点だけを指摘しておかねばならぬ。

そのひとつは、豊田氏が、「私的所有」、「私的占有」および「資本主義的所有」という、三つの異った意味を持つ基本的術語を、無原則的に混同しているといこと、かかる混同は、総じて、経済理論全体についての基本的無理解を端的に論証するものでしかない、という事実である。このことは、「基本的矛盾」についての第一の範疇に属するすべての所論を通じて、その一般的特徴となっているのである。

その二は、氏のいわゆる『商品生産の根本的矛盾』なるものが、実は、商品生産の二前提条件――私的所有と自然発生的分業――についての、きわめて拙劣な、無原則的誤解と誤用にもとずく一表現にすぎないということである。およそ、経済学でとりあつかう生産が、すべて人間社会を支える生産であり、つねに社会的生産でなければならぬことは、自明のことでなければならぬ。その社会的生産が、私的所有にもとづく自然発生的分業の社会においては、直接社会的生産（または社会的労働）としてあらわれず、直接には私的生産（私的労働）としてあらわれざるをえない。私的生産物が社会的生産物に転化するためには、交換がおこなわれねばならぬ。「商品は社会のために生産されたのだから、その商品＝生産物は社会的性質をもっている」のではない。正にその反対である。生産物は自然発生的分業の結果、本来社会的生産物なのである。（自然発生的分業がなければ、たとえ私的所有に基礎をおこうと、その生産物は商品とならず、したがって、豊田氏のいう意味での「社会的生産物」とはならぬ）。本来社会的生産物たるべきものが、直接には私的生産物としてあらわれるところに、交換価値、したがって商品形態そのものの問題が生ずるのである。私的所有一般と自然発生的分業とがおこなわれているかぎり、生産物は交換価値をもち、したがって商品形態をとらざるを得ない。しかし、だからといって、私的所有と自然発生的分業とが相互に「矛盾」するとか、両者の間に「根本的矛盾」があるなどということはできない。むしろ矛盾は、商品生産そのものの中に、いいかえれば、使用価値生産と交換価値生産（価値生産）との間に現存するのであり、この矛盾が、「交換」によって「解決」されるのである。使用価値（生産）と価値（生産）との間にこそ矛盾があるのであって、この矛盾は、豊田氏のいうごとき「生産の社会的性質」と「私的所有」との『矛盾』によっておきかえられるべきものではない。前者は、まさしく、私的所有と自然発生的分業という、特定の生産関係よりして必然的に生れるものなのである。「交換」によって「解決される」ごとき

「資本主義の基本的矛盾」など、およそノンセンスというのほかない。

つぎに、挙げられるのは、**川崎己三郎氏**による『定式化』とその『解釈』である。川崎氏の主著、「恐慌」（岩波新書）の中の、とくに「生産の社会的性質と領有の私的形態との矛盾――生産の無政府性」と題された一節の中には、「資本主義の基本的矛盾」にかんする、つぎのごとき説明を見出すことができる。

「ところが、資本主義的生産は、けっしてこういう計画にしたがっておこなわれているのではない。単純な商品生産においても、すでに、各生産者は、結果からみて、それぞれ他人の欲望をみたすために働らいているのではない（社会的分業）のであるが、しかも彼等はそれを具体的に意識せず（!?）、銘々自分の見込みにもとづいて勝手に働らいている。生産はすでに社会的性質をもっていながら、労働は私的（個々別々の）形態をとっている。これは明らかに矛盾である。資本主義のもとにおいても、この矛盾はさらに発展して、生産の社会的性質と領有の私的＝資本主義的形態の矛盾となる。資本主義のもとでは、商品生産が最高度に発展し、生産の社会的性質は、ますます強くなる。……どの資本家も、他の資本家なしにやってゆけない。すべての生産は一つの社会的生産過程に合流する。ところが、各々の生産は、個々の資本家によって経営され、その生産物は、この資本家の所有となる。……」（「恐慌」、三七ページ、傍点および（!?）―山本）。

なお、右の節にすぐつづいて、「資本主義生産の根本矛盾、恐慌の究局の原因」と題された一節が置かれ、その冒頭には、つぎのごとき文章が見出される。

「資本主義生産の根本矛盾が、生産の社会的性質と領有の私的＝資本主義的形態の矛盾にあることは、すでに述べた」（前出、四〇ページ）。

すなわち、川崎氏にしたがえば、

㈠　「資本主義生産の根本矛盾」＝「生産の社会的性質と領有の私的形態との矛盾」は、単純商品生産にも、資本主義的生産にもひとしく存在する。両者の差違は、いわば、量的なものにすぎない。質的転化の関係はないのである。

㈢ 「生産の社会的性質」とは、各生産者が「結果からみて」「それぞれ他人の欲望の充足のために」働らいていることであり、「領有の私的形態」とは、各人が、「他人の欲望充足のために」働らいていることを具体的に意識しないで、銘々自分の見込にもとづいて勝手に働らいているということである。

見られるとおり、川崎氏の所論においては、「資本主義の基本的矛盾」はたんなる「商品生産の矛盾」にすぎないのであって、しかもその『矛盾』たるや、各商品生産者が「他人のために働らいていながら、しかもそのことを意識しないで銘々勝手に働らいている」という点に存するものでしかないのである。要するに、右の引用の中で述べられていることは、さきに豊田氏の所論について最初に述べたところと同様の事柄を、いいかえれば、社会的生産（労働）が直接には私的生産（労働）としておこなわれざるをえない、ということを、きわめて拙劣に、すなわち、生産者の「意識」の問題に絡みあわせて説明したものである。だが、この場合、生産者の「意識」などはまったく問題にならない。商品生産者は意識しようとしまい(註)とにかかわらず、私的生産（私的労働）をおこなうのである。それは、直接には社会的生産（労働）となりえない。生産物の交換を通じてのみ、私的労働は社会的労働に転化されるのである。これによってみても、川崎氏の所論が、「矛盾」という、原則的な術語一つについて充分な説明を与えることをしないで、これをたんに使用価値（生産）と価値（生産）との「矛盾」にすりかえてしまっていることは疑う余地がない。かくして、氏によって『恐慌の究局の原因』と呼ばれる「資本主義生産の根本矛盾」についての説明なるもの、実はどこにも、まったく見当らないことになってしまうのである。

（註） 川崎氏の主張されるごとく、商品生産者が「具体的に意識する」か否かを取り上げることは、まったく見当外れと云うのほかない。「他人のために働らいている」ことを「具体的に意識して」いても、労働はあくまで私的労働でしかない。また、「他人のために働らく」ことを商品生産者が「具体的に意識していない」などという主張は、およそ商品生産の実体をまった

くわきまえない、「現実離れ」した主張といわなければならない。商品生産者は、自分の生産物を誰が（すなわち、他人＝購買者が）使用するかということぐらい、判りすぎるほどよく判っている。だからこそ、できるだけ交換価値（および利潤）を大きくしようとするのである。

第三に、**宮川実氏**による「資本主義の基本的矛盾」の『定式化』を簡単に挙げてみよう。

宮川氏は、その著、「改訂経済学入門」の「第八講　一般的過剰生産恐慌」の中において、まず「恐慌の可能性」につき簡単に説明され、「これらの可能性を現実性たらしめる要因がなかったのである。」と述べたのち、これにすぐひきつづいて、「生産の社会的性格と資本家的私有との矛盾は資本の蓄積を不可避的ならしめる」および「資本の蓄積は恐慌の原因に転化する」（註）という、二つの小見出しをつけた二小節を置いていられる。その中、前者の小節は、つぎのような言葉をもってはじめられている。

「それでは恐慌の可能性を現実性に転化させる要因は何であるか、これは資本主義的生産様式の基本的矛盾、すなわち生産の社会的性格と生産手段の資本家的所有との矛盾である」（前出、二二三ページ、傍点―山本）。

（註）ここに挙げた二つの小見出しは、「基本的矛盾」なるものが「恐慌の原因」ではないこと、「基本的矛盾」はたんに「資本の蓄積」を「不可避的」ならしめるだけであること、この「資本の蓄積」こそ「恐慌の原因」であることを、疑う余地なく明示しているのであるが、その同じ節の中に、「恐慌の不可避性を現実性に転化させる要因」こそ「基本的矛盾」であるという主張が述べられているのである。ここで当然問題になるのは、いったい、「恐慌の原因」と「恐慌の可能性を現実性に転化させる要因」とは、どれだけ異っているか、ということである。

なお、参考までに、同じ著者の手に成る「資本論研究」（第十号）より、「資本主義の基本的矛盾」にかんする『定式化』を引けば、つぎのとおりである。

「レーニンは、生産の無政府状態が生産の社会的性質と私的占有との矛盾から生ずるものであることを証明した。資本主義

のこの根本的矛盾の結果であり発現である生産の無政府状態こそは、恐慌の原因である」(註)(前出、三九ページ、傍点―山本)。

(註) ここに見出される「生産の無政府状態」という言葉は、本稿において行論の中に引用されているレーニンの論文「経済的浪漫主義の特徴付けによせて」の中の一節に述べられているところをそのまま引き写したものにすぎない。

見られるとおり、宮川氏の所論においては、「基本的矛盾」にかんする『説明』よりむしろ、『定式化』そのものにすでに重大な問題が含まれているようである。『生産の社会的性格』は正しい「定式化」のそれをそのまま受けついでいるが、「領有の私的性質」のかわりに置かれているのは、『資本家的私有』、『生産手段の資本家的所有』および『私的占有』という、三種の言葉である。このような『定式化』そのものについての問題は、行論の中において自ら解明されるところである。

第一の範疇に属する『定式化』および『解釈』の例として、最後に挙げられるのは、**宮崎犀一氏**の所論である。われわれは、雑誌「マルクス・レーニン主義研究」第一号(一九五三年一月刊行)に載せられた宮崎氏の論文、「恐慌」の中から、「資本主義の基本的矛盾」にかんする氏の若干の『説明』をつぎに挙げてみよう。

(1) 「資本主義的生産様式は運動する。その原因はこの事物(!?)の矛盾性――生産の社会性と私有の私的性質という基本的矛盾――にある。この事物(!?)の発展過程のなかには初めからしまいまで矛盾の運動(!?)、したがって(!?)矛盾の運動諸形態(!?)――商品・貨幣・資本・等々の経済的諸範疇――があり、これらの諸矛盾にたいし基本的矛盾は矛盾の普遍性(!?)として、したがって前者は矛盾の特殊性として把握される。矛盾の普遍性は矛盾の特殊性を媒介としてのみ存在し、また激化し尖鋭化する。(しかし矛盾のこの普遍性自身が、階級社会一般における生産力と生産関係との矛盾からいうと、矛盾の特殊性であり、この特殊性――資本主義――の中で、普遍性――階級一般(!?)したがって(!?)商品・貨幣といった矛盾――が存在し発展する。)」(前出、一〇〇ページ、傍点―宮崎氏、(!?)―山本)。

(2)　「資本主義的矛盾の特殊性の運動（!?）は、つぎのようにおこなわれる。矛盾の運動諸形態の全関連はつぎのようなものである。

基本的矛盾を最も抽象的・簡単に表現するある特殊的矛盾（労働の二重性）は、自分を運動させる（!?）形態（商品）の中で、一定の程度まで（!?）成長し、もはやその形態のもとではそれ以上の成長が不可能となるや、その要求（!?）を満す別のあらたな運動形態（貨幣）を創造し、その形態のもとで古い矛盾を運動させる（!?）と「過程の内的統一は外的諸対立において運動する」」（前出、一〇〇ページ、傍点および（!?）―山本）。

(3)　「また運動諸形態の序列は、資本主義の基本的矛盾が抽象的なものから具体的なものにまで論理的に（!?）運動する順序であり、基本的矛盾が最も尖鋭化する恐慌・崩壊を諸規定（!?）の綜括として真に具体的なものとして認識するための理論的方法の要請であるから、けっして歴史的生成の跡をしめすものではない。恐慌・崩壊こそ、かかる矛盾（対立物の統一）の特殊性の最後の形態であって……」（前出、一〇〇ページ、（!?）―山本）。

ここに述べられているのは、いずれも、ヘーゲルまがいの観念的おしゃべりばかりである。ことに(2)の箇処のごときは、そのヘーゲル式の逆立ち論理（註）を如実に示してあまりないものである。だが、われわれとしては、当面、問題たる「資本主義の基本的矛盾」について、宮崎氏の主張しているところを確認しておくにとどめよう。すなわち、宮崎氏によれば、

(一)　「資本主義の基本的矛盾」なるものは、『矛盾の普遍性』であり、「資本主義的生産様式」という『事物の発展過程のなかに初めからしまいまで』あるものである。

(二)　「基本的矛盾」は「労働の二重性」において『最も抽象的簡単に表現』され、なおさらに「商品」、「貨幣」、「資本」等々のごとき『自分を運動させる形態』を創造する。

(三)　矛盾の『運動諸形態の序列は、資本主義の基本的矛盾が抽象的なものから具体的なものにまで論理的に運動する順序』である。

要するに、「資本主義の基本的矛盾」は、たんなる「商品」そのものの中にすでに含まれているばかりでなく、「労働の二重性」の中にも「抽象的・簡単に表現されている」というのである。かようにして、ヘーゲルかぶれの迷論理の極致はついに「資本主義の基本的矛盾」をして「資本主義の基本的矛盾」としての本質を「脱却」せしめるにいたったものである。ここに述べられている「基本的矛盾」は、けっして「資本主義の基本的矛盾」ではなく、精々のところ「商品生産一般の矛盾」が観念的に歪められて把えられたものでしかないのである。

（註）宮崎犀一氏の所論の本質的特質をなすところの、ヘーゲル式たわ言は、恐慌にかんする、つぎのごとき氏の『説明』の中にも端的に示されている。

「恐慌の問題は、マルクスにとって理論的実践的関心と活動（!?）の中心であり、窮極の目標（!?）であった。マルクスの思想の中で、恐慌はゴール（!?）であると同時にスタート（!?）である。アルファ（!?）であるとともにオメガ（!?）であった。すべての経済現象の帰結（!?）が恐慌であり、「ブルジョア経済のすべての諸矛盾の現実的な包括および強制的な解決」、逆に恐慌から出発すればすべての経済現象の本質がわかる（!?）。というのがマルクスの社会主義（!?）がおしえるところであった。

ここに、われわれが恐慌論をまなぶいみがある」（前出、九七ページ、（!?）―山本）。

恐慌は、「窮極の目標」であり、「ゴール」であり、「スタート」であり、「アルファ」であり、「オメガ」であり、「すべての経済現象の帰結」であり、「そこから出発すればすべての経済現象の本質がわかる」ものである!! このような『主張』を前にしては、われわれは、ただ、理論以前の問題、さらに論理以前の問題を見出すのみである。いいかえれば、「窮極の目標」というひとつの言葉についての氏の『理解』を問題とせざるをえないのである。

右のように、いわば「オールマイティ」の「恐慌」を、さらに規定するものは、「基本的矛盾」でなければならぬ。かくしてこそはじめて、その「基本的矛盾」が「事物の発展過程のなかに初めからしまいまで」、「抽象的なものから具体的なものまで」いっさいを通じて『運動』するものとなるのである！

右の宮崎氏のヘーゲル式たわ言は、ただちに当の宮崎氏の所論に適用されねばならぬ。すなわち、氏の恐慌にかんする所説は、およそ曲解と誤謬の累積でしかないのであるから、氏にとっては、「窮極の目標」も、「ゴール」も、「スタート」も、「アルファ」も「オメガ」も、「すべての終結現象の帰結」も、――いっさいチンプンカンプンである、ということにならざるをえない。かかる「現実」の「客観的審判者」たるものがすなわち「基本的矛盾」にかんする氏の『理解』なのである。

なお、ここに、「資本主義の基本的矛盾」にかんする、第一の範疇および第二の範疇に属する『説明』の中間に位するものとして、――というよりは、むしろ中間的な、きわめて「不充分な」説明の例として、――守屋典郎氏および長洲一二氏の所論を挙げておかなければならない。

守屋典郎氏はその近著、「軍事経済と恐慌」の「第二章　経済恐慌の理論」、「第一節　恐慌の意義と必然性」の「2　恐慌の必然性」の中でつぎのように述べていられる。

「資本主義の基本的矛盾、すなわち、生産の社会化と私的領有との矛盾について、レーニンは云う。

「資本主義的生産による労働の社会化とは、けっして……その資本家の自由意思に依存し、社会的生産物は資本家の私的所有にひきわたされる。生産の形態が占有の形態と和解しえない矛盾におちいっていることは、明白ではないであろうか」（前出、八八ページ）。

そして、右の引用につづいて、ただちに「このような矛盾」という言葉をもって『説明』がおこなわれ、「基本的矛盾」そのものの内容についての説明は、ほとんど見当らない有様である。

長洲一二氏は、最近刊行された「経済学講座」の第一巻「資本主義経済の基礎原理」の中で、「恐慌」の項を担当して執筆されているのであるが、その所論の中には、つぎのごとき説明が見出される。

「資本主義の確立によって、商品は完全に社会の全経済生活を支配するようになり、それは社会の生産力の巨大な発展をもたらした。商品生産が発展すればするほど、個々の生産部門や企業は、社会全体が必要とする物質の一小部分を生産し、ほかの無数の生産部門や企業とのあいだに商品流通をとおして相互に密接な依存関係にはいりこむ。商品生産の発展は、生産力の巨大な増進であり、生産の社会性の飛躍的な発展である。しかし他面、以上のことは資本と賃労働という生産関係を基礎として、資本の利潤追求のために行われる。したがって、この発展した生産力の成果は、資本家の私的領有に帰する。生産の社会性の巨大な発展と資本主義的な私的領有との矛盾――これこそ資本主義における生産力と生産関係との基本的矛盾であり、恐慌の根本的な原因にほかならない」(前出、二七八ページ、傍点―長洲氏)。

ここで長洲氏が『生産の社会性』として述べていられるのは、実は、たんなる商品生産ということにすぎないのであって、精々のところ、これが資本主義のもとで「完全に」発展するということでしかない。このような、『生産の社会性』についての理解は、それ自身、ひとつの重大な問題をふくむものである。また、『資本家の私的領有』については、「商品生産の発展」が「資本と賃労働という生産関係を基礎として、資本の利潤追求のために行われる」ということの「成果」として、説明されている。「資本関係」あるいは「利潤追及」は、要するに、商品生産の特殊歴史的な規定としての「資本主義的生産」ということの表現であるが、それらは、けっして「資本主義的領有」ということの内容をあらわすものではない。問題は、「領有」という言葉を説明し、「資本主義的領有」とは何かを説明することにある。たんに「資本関係」および「利潤追及」という「資本主義的生産」の説明をしただけで、「その成果」が「資本家の私的領有に帰する」と述べたのでは、「資本主義的な私的領有」という言葉がそこに置かれる「論理的必然性」もなくなってしまうのである。

「資本主義の基本的矛盾」とは何かという問題については、とくに「生産の社会的性質」および「領有の私的性

質」という言葉をくりかえしただけではまったく不充分である。「生産の社会的性質」とは何か、「領有の私的性質」は何か、ということを、厳密に規定し、説明しなければならない。その上ではじめて「基本的矛盾」が真に「基本的と矛盾」である所以が説明されうるのである。（註）

（註）およそ「資本主義経済」について論ずるかぎり、「資本主義の基本的矛盾」についての説明を抜きにしては、その議論は十分正しいものとなりえないことは、いうまでもないところである。ところが、右に引用した長洲氏の論文が収められているところの著書は、「資本主義経済の基礎原理」と題して、しかも「資本論」にしたがって全体系を展開しているはずであるにもかかわらず、「基本的矛盾」についての説明がまったく見出されないことは、驚くべきことである。本書において「資本主義の基本的矛盾」について説明が行われるべき箇処は、さきに挙げた宮崎犀一氏が担当されているのであるが、「資本論」第一巻第七篇より第二巻第三篇にいたるまでを『資本の再生産過程』の説明として、一気に片附けてしまう氏の論法を前にして、「基本的矛盾」は、その姿をまったく潜めてしまったものである。

ついでながら、資本主義の『原理論』を呼号される宇野弘蔵氏が、その著「経済原論」の中において、「資本主義の基本的矛盾」ということについてまったく触れるところなく、「恐慌の必然性」についても、『労働者の賃金の騰貴』による『利潤率の急激な低下』という、トゥトロギー的論法に頼っていられるのは、きわめて、特徴的というべきである。

なお、ここで見逃すことのできないのは、「資本主義の基本的矛盾」の内容についての重要な説明を含む「資本論」第一巻第七篇を採り上げながら、しかも、「基本的矛盾」をまったく見逃しているばかりか、第一巻第七篇と第二巻第三篇とはその内容の性質がまったく異なるにもかかわらず、たんに「単純再生産」および「拡大再生産＝蓄積」という言葉が両者に見出されるというきわめて皮相的な「理由」によって、両者を一括して、『資本の再生産過程』あるいは『蓄積と再生産』という表題のもとに、同じ章の中で取扱うという、きわめて論理的ならざる「論法」をあえて採用することにおいて、宇野氏と宮崎氏とがたまたま完全な一致に到達している点である。すなわち、宇野氏の場合、その「経済原論」上巻の第三章、「資本の蓄積過程」の内訳は、「一、資本の再生産と蓄積」、「二、資本家的蓄積の現実的過程」、「三、社会的総資本の再生産過程」となっているが、これらを「資本論」の内容に対比させてみるとき、宇野氏の「第三章」は第一巻第七篇の表題をそのまま探ってきながら、しかも第二巻第三篇をその「三」として含んでいる点で、きわめて特異な体裁をもつにいたっている。その「一」は

いうまでもなく、第七篇第二十一章「単純再生産」および第二十二章「剰余価値の資本への転化」にあたり、その「二」は第二十三章「資本制的蓄積の一般的法則」にあたる。

宮崎犀一氏の場合、『論理』ははるかに飛躍的性質に富んでいる。「経済学講座」第一巻「資本主義経済の基礎原理」の「Ⅳ　蓄積と再生産」の内訳は、「1　資本の再生産—その基本形態」、「2　資本の蓄積または拡大再生産」、「3　蓄積と資本主義経済の動向」、「4　資本の蓄積と労働階級」となっており、「1」および「2」は宮崎氏の執筆にかかるものであるが、その「1」は、「個別的資本の単純再生産」と「社会的総資本の再生産」および「資本の循環」までを含み、その「2」は、「個別的資本の拡大再生産」および「社会的総資本の拡大再生産」とに分たれているのである。かくして、「資本論」の第一巻第七篇第二十一章」＋(プラス)「第二巻第一篇第一章、第二章および第三章」＋「第二巻第三篇第二十章」によって、宮崎氏の論文の「1」が作文され、「資本論」の「第一巻第七篇第二十二章」＋「第二巻第三篇第二十一章」によってその「2」が作文されているのである!!（「資本論」第一巻第七篇第二十三章「資本制的蓄積の一般的法則」は、最後の「4　資本の蓄積と労働階級」の内容を成すことになっているが、この部分は横山正彦氏の担当するところとなっている）。「資本論」は『論理』的『作文』にとってまことに無限の「宝庫」であり、「宝物」の取捨選択は、この上なく自由自在である！

「資本論」の『論理』からではなく（『論理』から云っても、おそらく、そうでなければならないであろうが）、「資本論」の理論から云えば、右の両氏によってあえてなされたところの、個別的資本と社会的総資本との『再生産過程』の並列的説明は、まったく誤まりというべきである。なぜならば、「資本論」第一巻第七篇における「資本の蓄積過程」の分析は、第二巻第三篇「社会的総資本の再生産と流通」における分析と、その視角および内容をまったく異にするものだからである。

さて、つぎにわれわれが検討しなければならないのは、「基本的矛盾」についての、周知の「反デューリング論」の当該箇処を参照した上で、「基本的矛盾」について説明を与えようとした試みである。さきに述べたごとく、この、当然の試みは実はきわめて稀で、わずかに、岡本博之氏および藤塚氏の所論において見受けられるだけで——そのほかの諸氏の所論においては、たんに「形式的」に参照されているにすぎない——あるようである。藤塚氏のこれにかんする説明は節を改めて吟味することとし、ここでは岡本氏の説明を省みることにしよう。エンゲルスの所論を参照

してはいるものの、岡本氏の説明はいたって簡単なものである。すなわち、氏は、林直道氏との共同研究に成る論文「恐慌論の基本問題――「部門間の均衡」と「消費制限」の連繋」（「経済評論」一九五〇年十月号所載）の中で、「エンゲルスによる基本的矛盾の叙述」として、つぎのような『説明』を与えていられるのである。

「(1) 商品から資本への発展の成果は、一言でいえば、生産を社会化したところにある。従ってそれは、本来私的生産に照応するものであった私的占有という占有形式の前提を廃絶するものでなければならぬ。しかるにこの社会化された生産方法（生産力）がなお依然として私的占有なる形式（生産関係）に隷属している。これが資本主義に固有な・本質的な・基本的矛盾をなすのである」（前出、八〇ページ、傍点―岡本氏）。

「商品から資本への発展」によって『私的生産』が『生産の社会化』に変ったことは、エンゲルスの指摘によっても明らかであるが、なぜ、『私的占有』が『私的生産』に『照応するもの』であるか、またなぜ、『私的生産』に『照応する』『形式』たる『私的占有』が『生産の社会化』の後にもこれを『隷属』させることができるのか、という、問題の内容については、説明はまったく与えられていない。このような、『説明』の欠陥は、すでに、『私的占有』という言葉が無反省に用いられている点に、端的にあらわれているのである。また、ここで『なお依然として私的占有なる形式』と述べられて、『商品から資本への発展』にもかかわらず、依然として『私的占有』は同じであるというような説明が与えられているのは、――『私的占有』という言葉についての本質的無理解が介在することによるのは明らかであるが――「基本的矛盾」が真に「資本主義の基本的矛盾」である点に十分の注意が払われていないことを示すものである。要するに、右のごとき『説明』をもってしては、「エンゲルスの叙述」についてのきわめて問題ある『要約』にすぎないものとならざるをえないのである(註)。

（註）岡本氏と林氏との共同研究に成る右の論文の中では、見られるごとく、一応、「資本主義の基本的矛盾」についての『説

明』が挙げられているのであるが、右の論文をさらに『補完＝発展』せしめられたとみられる林氏の論文、「再生産構造と恐慌の理論」（「経済評論」一九五三年一月号）の中で、この「基本的矛盾」にかんする『説明』がまったくその姿を見せなくなっていることは、きわめて特徴的である。さきの論文においても、『一部門の突出的過剰生産』というがごとき、「均衡論的」恐慌論が展開されているのであるから、「基本的矛盾」は本来、無用であったのであるが、後の論文においては、「問題は、まさに、社会的資本の再生産過程のなかに、過剰蓄積・均衡破壊を不可避にする構造を検出することでなければならない」（前出、一九五三年一月号、六八ページ、傍点―林氏）というように、典型的な均衡理論の「根元」を「穴掘り」することに専念されているために、もはや、「基本的矛盾」について省みる余裕のなくなったことは、まことに理の当然というべきである。ついでながら、ここでわれわれの少なからぬ関心を惹くのは、林氏の右の『過剰蓄積論』が、林氏らによって極力排撃されている当の宇野弘蔵氏の恐慌論の中心点たる『過剰蓄積論』と、一脈相通ずるもののあることである。林氏にあっては、『過剰蓄積』は、『均衡破壊』をもたらし、宇野氏にあっては、同じ『過剰蓄積』は、『賃銀の騰貴、利潤率の急激な低下』を惹きおこし、いづれも、「恐慌」の「原因」に成り上るのである。

第二節　藤塚氏の「反デューリング論」による「説明」

さきに述べたごとく、藤塚氏は、「資本主義の基本的矛盾」の『根源』がエンゲルスの「反デューリング論」の第三篇第二章の中で展開されているとして、「それゆえわれわれはこのエンゲルスの記述によって「基本的矛盾」の内容を理解し得るわけである」と述べていられる（前出、二一ページ）。そして、「反デューリング論」の当該箇処に依拠しつつ、藤塚氏は、自説を『展開』されるわけであるが、まず、この『引用』がきわめて「部分的」であり、「作為的」であることに充分なる注意が払われなければならない、次節において、われわれ自身の見解を述べるさいに、説明の必要上、「反デューリング論」の当該箇処の全文をかかげてこれについて検討がおこなわれるはずであるが、藤塚氏がこ

の当該箇処からどれだけのものを『引用』されているか、その『解釈』の性質を充分吟味するために、われわれは、藤塚氏による当該箇処の『引用』を、まずつぎに挙げておくことにしよう。藤塚氏は、「エンゲルスはこの矛盾をつぎの順序で説明する」として、エンゲルスの原文にならって、三つの小節に分って、これを『要約』していられる。

「(1) 資本主義的生産以前（中世）においては、一般に小経営のもって立つ基礎は、労働者が自分の生産手段を私有することであったが、資本主義的生産様式とそのにない手たるブルジョアジーとは、これらの分散した狭小な生産手段を集中し拡大して現在のような強力な生産原動力に転化させることを、その歴史的役割とした。そしてそのためには個々人の生産手段から・人間の集団によってのみ使用される社会的生産手段への・転化が必然だったし、生産そのものも一連の個人的作業から一連の社会的行為に転化し、生産物も個々人の生産物から社会的生産物に転化した（ここで単純協業・マニュファクチュア・大工業の三段階を経ての発展について『資本論』第一巻第四篇「相対的剰余価値の生産」が参照されている）。

(2) ところが他方、社会内部の自然発生的無計画的分業が生産の根本形態であるところでは、この分業が生産物に商品の形態を与える（中世におけるその発達）が、こうした個人的生産者商品生産者の中に新しい生産様式が入りこみ、全社会を支配する自然発生的無計画的分業のまっただなかで個々の工場内に計画的分業がもちこまれ、個人的生産とならんで社会的生産が登場し、個人的生産がつぎつぎに敗北して社会的生産が全生産様式を変革した。しかもこの社会的生産は、その革命的性質にもかかわらず、反対に商品生産を促進する手段にして採用され、商品生産の新形態として登場したのであって、商品生産の領有形態そのものは引続き完全に効力を保持した。

(3) こうして、大工場やマニュファクチュアへの生産手段の集中が行われ、事実上社会的なものへの生産手段の転化が行われたのに、この社会的な生産手段と生産物は依然として個々人のそれらであるかのように取りあつかわれ、労働手段の所有者（資本家）は、生産物がもはや自分の生産物ではなくて専ら他人の労働の生産物であるのに、依然これを領有し続ける。生産手段と生産とが本質的に社会的となっているのに、それらは、個々人の私的生産を前提する領有形態に従属する。生産様式は、この領有形態の前提を止揚したのに、この領有形態に従属させられる。新らしい生産様式に資本主義的特性を与えるところの・この矛盾の中に現代のすべての衝突がすでに萠芽として存在している。この新らしい生産様式が支配的になればなるほど、社会的生産と資本主義的領有との間の相剋がますますはっきりと明るみに出る。これこそ、今日の社会がその中で運動

するところの・また大工業によって明るみにもち出されるところの・一切の矛盾の発現をなす基本的矛盾（Grundwiederspruch）である、というのである」（註）（前出、二二―二三ページ）。

（註）藤塚氏は、この『要約』にひきつづいて、「エンゲルスはさらにこの命題を発展させる」として、「基本的矛盾」が「プロレタリアートとブルジョアジーとの対立」、「個々の工場内の生産の組織化と全社会における生産の無政府性との対立」としてあらわれること、「恐慌」および「矛盾の解決」についての、エンゲルスの所説の『要約』をかかげていられるが、当面「基本的矛盾」の「展開」ではなくして「基本的矛盾」そのものの内容を明らかにすることが先決問題であるので、さしあたり、この後半の部分については、ここで触れることをひかえたのである。

「資本主義の基本的矛盾」そのものの内容についてのエンゲルスの叙述を右のように『要約』されたのちに、藤塚氏は、「それゆえわれわれは、これによっていわゆる「基本的矛盾」の内容を理解してよいことになる」（前出、二四ページ）と述べて、いよいよ、「基本的矛盾」の内容についての立ちいった『説明』に入られるのである。

藤塚氏の『説明』の内容は、大体において二つの部分より成っている。その第一の部分は、さきのエンゲルスの所論の「できるだけ忠実な要約」にもとずく「基本的矛盾」そのものの『説明』であり、他の部分は、「エンゲルスの規定」と「資本論」の『論理』との『関連』を論じたものである。われわれは、まず、第一の部分の『説明』より見てゆくこととして、「基本的矛盾」そのものについての氏の『説明』をつぎにかかげることにしよう。

「右の要約において明らかなように、エンゲルスが「社会的生産と資本主義的領有の間の矛盾」という場合、この矛盾はまさしく特殊的資本主義的生産に特有な矛盾としてつかまれているのであって、一方において資本主義的生産の発達がその歴史的役割として果してきたところの・旧来の分散的な生産手段から集中された大規模な強力な生産手段への転化・個々的生産から組織化され計画化され（工場内）かくして社会化された生産への転化・それによる生産力の大きな発展と〔社会的生産〕、他方においてこの生産の社会化および生産力の発展を条件づけ〔促進し〕同時に制約するところの・無計画的無政府的な商品生産を前提とする領有形態と〔資本主義的領有〕、この両者の間の矛盾として規定されている。右の意味での社会的生産が、

その革命的性質にもかかわらず、無計画的な商品生産の新形態として・登場し、商品生産の領有形態に従属させられる。この意味での「社会的生産」がこの意味での「私的領有形態」によって条件づけられ（促進しまた促進せられ）同時にこれによって制約されるという矛盾が、資本主義的生産の特性を形づくるわけである。

それゆえにこの基本的矛盾は、普通に理解されがちのように・単なる商品生産においてすでに含まれている社会的生産（社会的分業によって形成される社会的連関性）と私的領有との矛盾（無政府性）がただ発展したものと解すべきではないであろう。けだしそのような理解では、資本主義的生産の矛盾が、商品生産一般の矛盾に解消されてとらえられ、資本主義の資本主義たる所以が明確にされ得ないと思われるからである。したがってこの基本的矛盾は、単なる商品生産に含まれる矛盾とは質的に異った特殊的資本主義的生産に特有な・その歴史的役割と歴史的運命とにかかわらしめられた・矛盾として、理解されなければならないと思うのである」（前出、二四ページ、傍点―藤塚氏）。

「エンゲルスの規定では「資本論」の叙述方法とは反対に、まず資本主義的生産が最深の基礎を獲得したところをとらえて、それが「社会的生産」をわがものとしたことを指摘し、これを条件づけ同時に制約する「資本主義的領有」をこれに対・置する。「資本主義的領有」とは商品生産一般の領有形態たるものが・形態をそのままにして・拡大し普遍化して支配することであり、「商品生産一般」「労働力の商品化」を通じて支配的となる私的領有形態を示すものといえる。商品生産したがってそれに照態する私的領有は、もちろんそれ自身矛盾にみちたものである。しかしこの矛盾がそのまま発展して資本主義の基本的矛盾となるのではない。むしろこの矛盾にみちた領有形態がエンゲルスのいう意味での「社会的生産」をとらえてこれをわがものとするところに、したがって「資本論」における相対的剰余価値の生産と資本蓄積過程とを核心とする特殊的資本主義的生産の確立するところに、「基本的矛盾」が成立するのである。そしてこのことによって商品生産に含まれる矛盾が激化されることはいうまでもない」（前出、二六ページ、傍点―藤塚氏）。

ここにかかげたのは、「資本主義の基本的矛盾」そのものの内容にかんする藤塚氏の『説明』の全部であるが、この『説明』の全部は、これをつぎのごとく「要約」して示すことができるであろう。

（一）まず、「基本的矛盾」は「特殊的資本主義的生産に特有な矛盾」としてつかまれねばならぬ。

㈡ 「生産の社会的性質」とは、「旧来の分散的生産手段から集中された大規模な強力な生産手段への転化、個々的生産から結合され組織化され計画化され、かくして社会化された生産への転化」ということである。

㈢ 「領有の私的性質」についての『説明』は、若干『複雑』である。

(イ) 「資本主義的領有」とは、「「生産の社会化」(および「生産力の発展」)を条件づけ促進し同時に制約するところの、無計画的無政府的な商品生産を前提とする領有形態、すなわち、商品生産の領有形態」のことである。

(ロ) 「私的領有」は、「それ自身、矛盾にみちたもの」である。

(ハ) 「資本主義的領有とは商品生産一般の、領有形態が、形態をそのままにして、拡大し普遍化して支配すること」である。

㈣ では、右の両者の「組合せ」たる「基本的矛盾」の内容についてはどうであるか?――「基本的矛盾」は、「それ自身矛盾にみちた商品一般の領有形態が、「社会的生産」をとらえてこれをわがものとする(!?)ところ」に成立するものである。

「基本的矛盾」は、「「資本論」第一巻第四篇の「相対的剰余価値の生産」と、同じく第七篇「資本の蓄積過程」とを核心とする特殊的資本主義的生産の確立するところ」に成立するものである。

㈤ なお、「矛盾」という言葉についてはつぎの二つの事柄が特記されねばならない。

(イ) およそ「矛盾」には、三つの種類があるのである。

第一、「資本主義の基本的矛盾」

第二、「商品生産に照応し、それ自身矛盾にみちているところの、私的領有」自身のもつ「矛盾」

第三、「商品生産そのものに含まれる矛盾」

(ロ) 「資本主義の基本的矛盾」が「成立」することによって、「商品生産に含まれる矛盾」が「激化」する。

見られるとおり、藤塚氏の『説明』の内容をたんに『要約』して示しただけで、それが「基本的矛盾」の『説明』として、いかに不充分なものであるか、あきらかである。それらは、たんに不充分であるというばかりではない。む

しろ、「基本的矛盾」という事柄を、いいかえれば、「生産の社会的性質」と「領有の私的性質」あるいは「資本主義的領有」この問の「矛盾」ということを、――多少いい廻しを複雑にしただけで――くりかえしていいあらわしただけのものでしかない、ともいうことができるのである。

「生産の社会的性質」については、これにかんするエンゲルスの叙述が一部分踏襲されているが、しかし、「生産」ということの意味についての立入った考察がなく、そのために、たんに「個々的な生産」と「社会化された生産」とが並置されるにとどまっている。「領有の私的性質」については、その意味はまったく掘り下げられることなく、「生産の社会化」を「条件づけ促進し、制約する」という点に、わずかに『説明』らしいものが見出されるにすぎない。「私的領有は、それ自身矛盾にみちたものである」とか、「資本主義的領有」が「商品生産一般の領有形態」のたんに「拡大されたもの」にすぎないとか、いうごとき『説明』は、説明としてまったく不適当であるばかりでなく、厳密にいえば、「矛盾」という言葉についての一種の論理的遊戯であり、また、誤解にみちた『説明』といわなければならない。

総じて、藤塚氏は、「矛盾」という言葉にそれ相当の注意を払ってはいられないようである。このことは、右に挙げた「三種の矛盾」の中にはっきりと示されている。「それ自身矛盾にみちている私的領有」という場合の『矛盾』とは、いったい、何か？　本来、「矛盾」は「生産の社会的性質」と「私的領有」との間にこそ存すべきものなのに、その一方の「私的領有」だけの中に『矛盾』が存するとは、どういうことか？「それ自身矛盾にみちた商品生産一般の領有形態が、「社会的生産」をとらえてこれをわがものにするところに」、「矛盾」が成立するという場合の「わがものにする」とは、いったい、どういうことか、また、どうして「わがものにする」ことで『矛盾』が「成立する」のか？

藤塚氏がその『論拠』とされるエンゲルスの所論をいかに『要約』されたかということは、さきに引用したところ

であるが、その『要約』の中には、つぎのように述べられてあった。――曰く、「この社会的生産は、その革命的性質にもかかわらず、反対に商品生産を促進する手段として採用され、商品生産の新形態として登場したのであって、商品生産の領有形態そのものは引き続き完全に効力を保持した。」と（前出、二二ページ）。

この藤塚氏自身による『要約』でもあきらかなごとく、エンゲルスは、「社会的生産」が「商品生産」を「促進する」手段として採用されたこと、「私的領有」は「社会的生産」のもとでもひきつづき有効であった」ということを述べているのである。ところが、このような『要約』の内容は、藤塚氏自身の『説明』において、美事な『論理的転変』をとげてしまうのである。――『社会的生産』を『条件づけ』、『促進し』、『制約する』のが『資本主義的領有』である、と。しかも、このすでに『社会的生産』を『条件づけ』『促進し』『制約する』のが『資本主義的領有』であるのに、この『資本主義的領有』が、あらためて、この『社会的生産』を『とらえて、これをわがものとするところに』（註）（傍点―藤塚氏）『基本的矛盾』が『成立』することになるのである！

（註）「わがものにする」とは、ドイツ語で、aneigen ということである。この言葉の経済学的意味は厳密に規定されているのであって――（後述）――『資本主義的領有』が『社会的生産』を『とらえてこれをわがものにする』などというような『論理』的表現は、経済学的には、およそノンセンスである。「領有」という言葉は、Aneigung の訳であり、これは、aneigen の名詞形である。「資本主義的領有〔Aneigung〕」が「社会的生産」を「とらえてこれをわがものにする〔aneigen〕」などというように、「領有」という言葉と「わがものにする」という言葉とを結びつけ、「これをわがものにする」〔aneigen〕からして、「領有」〔Aneigung〕である、それが、『社会的生産』を「わがものにする」のであるから、「資本主義的」という「規定」を加えて、『資本主義的領有』となるのである、というように、『論理』的『推論』をこころみたのだとすれば、これは、たんなる『論理』的錯倒であるばかりでなく、完全な理論的混乱を示すものである。藤塚氏がこのような『こころみ』をあえて遂行されたかどうか明確ではないが、これを「推論」せしめるに足る「論理」的根拠は、充分あるようである。この、根拠のひとつ

は、右に挙げたところの、『社会的生産』を『条件づけ』『促進し』『制約する』『資本主義的領有』、という、『論理的転変』ないしは『錯倒』である。

なお、藤塚氏は、この「わがものにする」〔aneigen〕という言葉の意味を「論理」的に考察することよりも、これを各方面に『適用』することに注意を奪われていられるようである。さきの、氏による『要約』の中でも、つぎのように述べられている。

「エンゲルスの規定では『資本論』の叙述方法とは反対に、まず資本主義的生産が最深の基礎を獲得したところをとらえて、それが「社会的生産」をわがものとしたことを指摘し……」(前出、二六ページ、傍点—山本)。

ここで云われている『最深の基礎を獲得したところ』とは、のちに考察するごとく、「資本論」第一巻第四篇「相対的剰余価値」の生産に当るものである。相対的剰余価値の生産は、いうまでもなく、資本主義的生産方法の成立、一般化を意味するものであり、この場合の資本主義的生産方法とは、「協業」「マニュファクチュア」「機械制大工業」を指す。これらの資本主義的生産方法は、いづれも「社会的生産」の各特殊的歴史的形態である。だが、「社会的生産」は「相対的剰余価値の生産」のみにとどまらない。「絶対的剰余価値の生産」といえども、同じく「社会的生産」であることに変りはない。というよりも、むしろ、厳密にいいあらわせば、資本主義的生産とは、とりもなおさず、「社会的生産」以外のなにものでもない、ということである。「社会的生産」でない「資本主義的生産」はまったくありえない。しかも、「資本主義的生産」は、エンゲルスが正しく指摘しているごとく、「社会的生産」のはじまるところに、(われわれは、商品生産社会について述べていることに注意されたい)、「資本主義的生産」ははじまるのである。このように見てくれば右の藤塚氏の『説明』は、『わがものにする』という言葉についての『論理』的(というより、むしろ、「国語的」というべきだが)「無理解」を示しているばかりでなく、また、理論的にも誤まっていることが明らかとなるであろう。また、ここでは、エンゲルスの規定が「資本論」の叙述方法とは「反対」であると主張されているが、この点についての検討は、つぎに、「資本論」の『論理』についての氏の『説明』を吟味するさいにゆづることにしよう。

要するに、「資本主義の基本的矛盾」にかんする藤塚氏の説明は、せっかく、エンゲルスの「反デューリング論」中の該当個所を『論拠』として採用されながら、その『論拠』の『最深の基礎』をとらえることをせず、きわめて皮

相的に「基本的矛盾」の『定式化』をくりかえし、しかも誤まった「形容句」を附してくりかえすことにのみ、終っているようである。このように「基本的矛盾」についてその『最深の基礎』をとらえられなかったことの理由としては、ひとつには、氏が、さきにも述べたごとく、「矛盾」という言葉について深い考慮を払われなかったということにあると考えられるが、それにもまして重大なことは、氏がそもその「**生産**」というもっとも基低的な概念について、正しい考察をもっていられないということによるものと考えられるのである。

事柄は、すべて「**生産**」にかんするものである。この「**生産**」の内容、その経済学的意義を充分に考察することなしには、およそ「基本的矛盾」はおろか、「資本主義的生産」という言葉ひとつでさえ、これを正しく用いることはおぼつかないのである。なぜならば、「資本主義的生産」とは、「資本主義的」という「規定」をもった「**生産**」であるからである。「生産の社会的性質」という言葉にしても同じである。また、「私的領有」にしても、この言葉をうのみにしてたんに『商品生産一般の領有形態』とか『資本主義的領有』とかいう言葉をただくりかえしていただけでは、むしろ自分自身混乱に陥るばかりである。「**生産**」の内容と正しく結びつけることによって、「領有」の内容は正確に把握されうるし、したがってまた、「私的領有」という言葉も明らかにされうるのである。「**生産**」という言葉を正しく理解するときには、「私的領有」あるいは「商品生産一般の領有形態」という言葉と、「資本主義的領有」という言葉とが、けっして厳密には同じものでないこと、これら相互の間にまさしく重要な差違があること、しかもこれら両者の間には弁証法的な、発展関係があることが、おのずから明らかとなってくるのである。

かようにして「生産」という言葉のもつ経済学的内容を正しく掘り下げられなかったところに、藤塚氏の『説明』の欠陥の『最深の基礎』が横たわっているのである。「資本論」の『論理』を云々し、たんに『論理』的に「形容句」

を附けただけでは、『最深の基礎』のごときは、皮相な「うたい文句」に終ってしまい、肝腎の「基本的矛盾」の本質はかえって歪曲されてしまうことになるのである。だが、以上、理論的混乱は別として、たんに皮相的に『論理』の点からみただけでも、藤塚氏の右の『説明』はきわめてあやしい性質のものと云わざるをえない。こころみに、氏の『説明』の最後の結論部分を見直されたい。

「私的領有形態が「社会的生産」をとらえてこれをわがものとするところに、「基本的矛盾」は成立する。」

「『資本論』における相対的剰余価値の生産と資本蓄積過程とを核心とする特殊的資本主義的生産の確立するところに、「基本的矛盾」が成立する」。(以上、いづれも前出、二六ページ、傍点―藤塚氏。)

「資本主義的生産」は、「社会的生産」(いうまでもなく、商品生産の一形態としての)のはじまるところに、はじまる。両者は同じ事柄の異った表現でしかない。また、「基本的矛盾」とは、「資本主義の基本的矛盾」であり、「資本主義的生産」と、その生成、発展および消滅を同じくする。それゆえ、右の、藤塚氏の『説明』は、まったくのトウトロギーでしかない。「「社会的生産」(これは、「資本主義的生産」である!)をとらえてわがものとするところに」、「資本主義的生産が確立し」、「基本的矛盾が成立する」!!(註)

(註)　さきに述べたところであるが、宮崎犀一氏の場合といい、藤塚氏の場合といい、「資本論」の『論理』のみを強調する論者にかぎって、特殊の、論理的錯倒と「混乱」ないしはありふれたトウトロギーに陥っているのは、きわめて特徴的である。

では、藤塚氏は、「基本的矛盾」にかんする以上のごとき『説明』をば、「資本論」の内容に照らしてどのようにこれと結びつけられるか、ということをつぎに考察することにしよう。ここでも煩雑をいとわず、まず、これにかんする氏の『解釈』をつぎにかかげ、もって、その『論理』的『特徴』をあはせうかがうよすがとしよう。

「それではこのエンゲルスの規定する「基本的矛盾」は『資本論』の論理との関連ではいかに解せられるべきであるか。

『資本論』では、まず資本主義的生産における最も抽象的一般的な範疇である商品から出発し、商品生産に含まれる諸性質（!?）の分析からはじめ（第一巻第一篇第一章）、商品→貨幣→資本の諸範疇に進み（第一巻第一―二篇）、資本の一般的範式（G―W―G′）を得、ここで「労働力」なる特殊の商品の検出を以て（第一巻第二篇）資本の生産過程（剰余価値の生産）の分析に入る（第一巻第三―七篇）。これに続いて流通過程の分析（第二巻）を経、最後に生産過程と流通過程との統一として総過程が分析される（第三巻）。かくして右のように構成される資本論の全論理（!?）において資本主義的生産の最も根本的な基礎をなすのは生産過程の分析（第一巻第三―七篇）であるが、この生産過程の分析は、㈠まず(1)絶対的剰余価値の生産（資本に対する労働の形式的包摂）として（第三篇）、(2)ついで相対的剰余価値の（生産資本に対する労働の実質的包摂）（協学・分業とマニュファクチュア・大工業）として（第四篇）、とらえられ、(3)この両者が絶対的および相対的剰余価値の生産（第五篇）労働力の価値の労賃への転化（第六篇）として総括され、㈡最後に資本蓄積過程が分析され、かくて以上の㈠の部分と㈡の部分とを以て生産過程分析の全体が構成される。そしてこのように構成される生産過程分析の中でもとくに核心をなすのは、相対的剰余価値の生産の分析であり、これの分析こそ資本主義的生産の確立を基礎づけるものであって、資本主義的生産が・生産力の発達という歴史的使命をわがものとし（!?）・労働の資本への形式的のみならず実質的な包摂を獲得することを明らかにするものである。この相対的剰余価値の生産を核心とする基礎（!?）の上に立って、資本蓄積過程分析が、すなわち（!?）相対的過剰人口＝産業予備軍を創出しつつ労働の資本への緊縛を確保し（!?）・消費の狭隘性を省みない生産の無制限的拡大をもちきたらすところの・資本蓄積過程の分析が行われる。かくして（!?）『資本論』の生産過程分析（第一巻第三―七篇）の中でもとくに第四篇（相対的剰余価値の生産）と第七篇（資本蓄積過程）とは最も根本的な（!?）中核をなすものといえる。

『資本論』の論理のこのような理解に立ってエンゲルスの規定をみるとき、「社会的生産と資本主義的領有との間の矛盾」の内容が・甚だ適確に資本の生産過程の最深の基礎をつかんでいることを、発見する。『資本論』の叙述においては、最も抽象的なものから具体的なものへの発展の道を進み、「商品生産一般」→「労働力の商品化を基軸とする資本主義的生産への進展」→「相対的剰余価値の生産を核心とするその（!?）最深の基礎の分析」という順序をとって、資本主義的生産の最深部（!?）の分析に到達するのであるが、エンゲルスの規定は、資本主義的生産が最深の基礎を獲得し（!?）・歴史的使命を以て確立した（!?）・まさにその点において（!?）資本主義的生産を特徴づけているわけである。「商品生産一般」（!?）が全社

会的に普遍的支配的なものとなるのは「労働力の商品化を基軸とする資本主義的生産」が普遍化する（!?）ときであるが、労働力の商品化＝（!?）資本主義的生産が全社会的に支配的普遍的になるのは機械制大工業の確立を以てエンゲルスのいう意味での「社会的生産」が資本主義的領有のもとで完成されるときである。この点（!?）は『資本論』の相対的剰余価値（第四篇）と本源的蓄積（第七篇第二四章）との諸章で明言されているところであり、またエンゲルスの規定における「社会的生産」の意味内容は、『資本論』の第一巻第四篇および第七篇第二四章第七節（資本主義的蓄積の歴史的傾向）での用語法と一致するものである。これらのことを考えるなら、エンゲルスの規定は、その叙述方法の相違にもかかわらず、資本論の論理を最も適確につかんでいることを知るであろう」（前出、二五―二六ページ、傍点―藤塚氏、（!?）―山本）。

ここにかかげられた『説明』は、一見きわめて『理路整然』たる『論理構成』のように思われるが、少しく立ちいって見るならば、その中核が、多くの「論理」的錯誤（註一）と『理論』的誤謬（註二）とを含んだ、たんなる『論理』的ドグマによって『構成』されていることが明らかとなるであろう。その「中核をなす」ドグマとは、要するにつぎのごときものである。

㈠　「『資本論』の全論理において資本主義的生産の最も根本的な基礎をなすのは生産過程の分析（第一巻第三―七篇）である」。

㈡　「『資本論』の生産過程分析の中でもとくに核心をなすのは、相対的剰余価値の生産を核心とするその最深の基礎の分析」。

㈢　「エンゲルスの規定は、適確に資本の生産過程の最深の基礎をつかんでいる」。

（註一）『論理』的錯誤の著例としては、ドグマの㈠を挙げることができるであろう。すなわち、氏によれば、「資本主義的生産の最も根本的な基礎をなす」のは「生産過程の分析（第一巻第三―七篇）」である、とされるが、これは、一方から見れば、およそ「理論」と「現実」とを無雑作に混同した逆論理といわざるをえない。なぜならば、「資本主義的生産の最も根本的な基礎」というのは、現実の、客観的に存在する「資本主義的生産の基礎」のことであり、たとえば、これを「資本関係」というように考えなければならないのに反して、「生産過程の分析（第一巻第三―七篇）」は「資本」にかんする理論の一構成部

分であり、「理論的分析」にすぎないからである。藤塚氏は、あるいは、「資本論の全論理において」という、冒頭の一句を引いてその『論理』的正当性を主張されるかも知れないが、「生産の基礎」という言葉は、いかなる『論理』を弄しても、「理論」(あるいは、『論理』)的分析または「理論」の一部分とはなりえない、それは、現実の、客観的な「生産関係」そのものでなければならない。また、一歩譲って、『資本論の全論理』という氏愛好の言葉に敬意を表して、「理論」(または「分析」)という文字を補って、「資本論の全論理において、資本主義的生産の、理論(または、分析)の最も根本的な基礎をなすのは生産過程の分析(第一巻第三―七篇)である」というように『訂正』したとしても、本来、この種の『論理』的ドグマの「中核」をなしているトゥトロギー的本性は、これを糊塗することはできない。「生産の基礎」をなすものは「生産過程の分析」である、というのは、「生産の基礎」は「生産の分析」であるというのと同じく、純然たるトゥトロギー的論法であり、ノンセンスである。

右のごとき、客観的「現実」と、その「意識的反映」たる「理論」との、幼稚な混同は、「相対的剰余価値の生産の分析こそ、資本主義的生産の確立を基礎づけるものである。」という、氏の『主張』の中にも、明瞭に示されている。

(註二) 「理論」的誤謬にいたっては、また著しいものがあるようである。たとえば、絶対的剰余価値の生産と相対的剰余価値の生産との「両者が絶対的および相対的剰余価値の生産(第五篇)労働力の価値の労賃への転化(第六篇)として総括され」(前出、二五ページ)という言葉についてみても、第一巻第五篇がその表題の示すごとく「両者を総括するもの」と見なされるのはある意味で正しいが、「労賃」と題された第六篇が何故に「絶対的剰余価値の生産」(第三篇)と「相対的剰余価値の生産」(第四篇)との「両者を総括するもの」となるのか、疑いなきをえない。たんに、第三篇、第四篇のつぎに第五篇第六篇が置かれているから、第三篇および第四篇の「両者が、第五篇、第六篇として総括される」というのであれば、これほど、理論的内容を無視した超『論理』的『構成』はないであろう。

また、「『資本論』の叙述においては、最も抽象的なものから具体的なものへの発展の道を進み、「商品生産一般」→「労働力の商品化を基軸とする資本主義的生産への進展」→「相対的剰余価値の生産を核心とするその最深の基礎の分析という順序をとって、資本主義的生産の最深部の分析に到達する。」という言葉をとってみよう。「資本論」の叙述についての、右のごとき『順序』を挙げることは、それ自体問題のあるところである。その冒頭におかれた「商品生産一般」という言葉を、同じ節の中で述べられている、「「商品生産一般」が全社会的に普遍的支配的なものとなるのは「労働力の商品化を基軸とする資本

主義的生産が普遍化するときである。……」という言葉と対比させれば、それがいかに理論的に誤まっているか、歴然たるものがあるであろう。「資本主義的生産」の『普遍化』によって『全社会的に普遍的支配的なものとなる』のは、「商品生産」であって『資本論』の冒頭に置かれていると主張されるごとき『商品生産一般』ではけっしてない。また、『資本論』の冒頭におかれている『最も抽象的なもの』は、「単純なる商品生産関係」であり、「私的所有一般」であって、けっして後に至って「全社会的に普遍的支配的なものとなる」ごとき『商品生産一般』ではありえない。右の「発展」の『順序』についても、「商品生産一般」→「資本主義的生産への進展」ということだけで充分であり、「相対的剰余価値の生産」は、その『資本主義的生産への進展』の内容の一部分を成すものにすぎない。もし「資本論」第一巻の叙述の順序にしたがって、氏のいわゆる『最深部の分析』にいたるまでの『発展順序』を描かなければならないとすれば、その『順序』は「相対的剰余価値の生産」を『最深の基礎』として終結すべきではなく、むしろ、「商品生産一般」→「労働力の商品化を基軸とする資本主義的生産への進展」→「絶対的剰余価値の生産」および「相対的剰余価値の生産」→「資本の蓄積過程の分析を核心とするその最深の基礎の分析」というように「構成」されなければならない。『資本主義的生産の最深部の分析』とは、けっして藤塚氏のいわれるごとく『相対的剰余価値の生産』にあるのではなくして、むしろ、「資本の蓄積過程の分析」にこそあるのである。

すでに、右の（註一）および（註二）によって、氏の『論理』的ドグマの「諸性質」は明らかにされたものと思われるが、何故にこのような『論理』的ドグマを――多くの『論理』的錯誤および「理論」的誤謬をおかされながら――あえて主張されるにいたったかといえば、その『最深の基礎』は、要するに、氏が「社会的生産」ということと、『相対的剰余価値の生産』ということとをまったく同じものだと考えたこと、かくして、一方の「社会的生産」が「基本的矛盾」の『構成分子』として重要な役割を与えられたのに対応して、他方の「相対的剰余価値の生産」の側も、「資本論」の『全論理』の中で当然『最深の基礎』たる地位を賦与せられざるをえなかったということに、これを求めるのが、論理的に云っても妥当であるようである。

「エンゲルスの規定は、資本主義的生産が最深の基礎を獲得し、歴史的使命を以て確立した、まさにその点において、すなわち「相対的剰余価値の生産」の点において、「資本主義的生産を特徴づけている。」という、氏の主張は、たんに「基本的矛盾」の一方の側のみについて、すなわち、「社会的生産」についてのみ、これを『拡張解釈』したものであって、他方の「私的領有」については氏のいわゆる『最深の基礎の分析』は『到達』していないのであって、右のごとき主張は、まったく理論的にみて誤謬というのほかない。

「資本論」の『論理』的構成のみに眼を奪われて、その理論的構成を見ようとしない者にとっては、『最深の基礎の分析』も、「エンゲルスの規定」も、ともに「相対的剰余価値の生産」に『結びつける』のが精々のところであるようである。だが、「資本論」の理論的構成を注意深く追究し、またエンゲルスの叙述を充分に味読するときには、――後述のごとく、――『最深の基礎』は、むしろ、「資本の蓄積過程」いいかえれば「資本関係の発展」に求められるべきであり、エンゲルスの規定も、「絶対的剰余価値の生産」および「相対的剰余価値の生産」と、「資本の蓄積過程」との「総括」としてとらえられなければならないことがわかるのである。

ところで、藤塚氏は、以上考察してきたように、エンゲルスの記述の『要約』およびこれにたいする『説明』、「エンゲルスの規定」と『資本論の論理』との『対応関係』を述べられたのちに、突如として、つぎのごとき『結論』を提示されているのである。

「これによって明らかなように、これらの問題は全資本主義的生産の最深の核心をなすものであり、『資本論』の論理（!?）と史的唯物論とのまさに結び目（!?）をなすものといえるのである」（前出、二六ページ、傍点―藤塚氏、（!?）―山本）

ここで云われている『これらの問題』というのは、その前文で述べられている「本源的蓄積の問題」、「相対的剰余価値の生産の問題」、「資本蓄積過程の根本問題」、「資本主義的生産（注意せよ、「蓄積」ではなく「生産」である！）の歴史的傾向の問題」、である。『これらの問題』を「資本論」第一巻の篇別構成と対比すれば、氏の『結論』の出たら目さ加減は、一目瞭然たるものがある。なぜ、「絶対的剰余価値の生産の問題」をことさら除外したのか？（その理由は簡単である。「絶対的剰余価値の生産」は「基本的矛盾」の『社会的生産』に『直結』しえないからである！）「絶対的剰余価値の生産の問題」を除外して、どこに「全（!?）資本主義的生産の最深の核心をなすもの」があろうか!?　ところが、このように、本来「核心をなすべきもの」が除外されていて、なおかつ、それらの『問題』が『『資本論』の論理と史的唯物論とのまさに結び目をなすもの」と断定されているのである。しかも、なんらの説明も、論証もなしに!!

藤塚氏の論文の副題は、とくに「史的唯物論との関連に視点をおいて」となっているのであるが、右のような、突如たる「史的唯物論」との『結び目』の出現と同時に『結論』の提示をもってしては、いかに「資本論」の『論理』に通暁した読者といえども、これを容易に呑みこむことはできないであろう。『史的唯物論との関連』が、いかにして、何故に、どこに存するかということの『説明』をまったく抜きにして、「史的唯物論との関連に観点をおいて」などとは、とうてい云えたものではないのである。

総じて、「資本論」の中の特定の部分について、「史的唯物論」との『結び目』を「探し廻る」こと自体、すでに重大な問題をふくんでいるものといわなければならない。このような『試み』は、むしろ、「資本論」の理論的内容を『論理』的に歪めるものとして、厳にしりぞけられなければならない。「資本論」の中のある特定の部分が、「史的唯物論」との『結び目』をなしているのではない。「資本論」全体が、史的唯物論と緊密に結びついているのである。

「資本論」の理論的内容全体が、史的唯物論をその『最深の基礎』としてもち、また同時に、いわば、史的唯物論の輝かしい「展開」と同時に「実証」とも成っているのである。もし、強いて、「史的唯物論と直接に結びつく」「結び目」を「資本論」の中の特定の部分に見出したいというのであれば、ひとはまず第一に、「資本論」の「窮極の目的」すなわち「近代的社会の経済的運動法則の暴露」に関する敍述を含む第一巻第七篇第二十四章第七節「資本制的蓄積の歴史的傾向」を挙げなければならないであろう。(註)

(註) ところが、藤塚氏は、右の『突如たる』『結論』に註を附して、さらに『突如たる』『拡張解釈』をこころみていられるのである。

「マルクスはクーゲルマン宛ての一八六七年一一月三〇日手紙の中で『資本論』第一巻について次のようにいっている。「奥さんに、『労働日』に関する部分、『協業・分業・機械』に関する部分、終りに『本源的蓄積』に関する部分が、最初に読むべき部分だと話して頂きたい」と。「最初に読むべき部分」とはまた資本主義的生産を最も端的に特徴づける部分でもあり、史的唯物論と直接に結びつく最重要部分でもあるわけである」(前出、二六ページ)。

マルクスがクーゲルマンの夫人に助言を与えたのは、当然第一巻第一節から読むべきだが、第一篇はきわめて難解であるから、まず最初に——第一篇からではなく——より多く歴史的、事実的敍述の豊富な「労働日」や「協業、分業および機械」にかんする節、それから「本源的蓄積」にかんする部分を読むのが解りよいという意味でしたものである。これらの部分が「史的唯物論と直接に結びつく最重要(!?)部分である」から、「最初に読むべき」である、などと云っているのでは、けっしてない。このことは、該当する文章を通読すれば明らかである。「最初に読んで解るところとして」(als zunächst lesbar)という自明の原文を、なにゆえに、ことさら「最初に読むべき」と強いて誤訳しなければならないのか、氏の強調される「資本論」の『全論理』の『観点』についても『最深の疑問』を抱かざるをえないのである。

最後に、「基本的矛盾」と恐慌との関連について、藤塚氏がこれをいかに『取扱う』ことをされているか、簡単にみておくことにしよう。レーニンの論文、「経済的浪漫主義の特徴づけによせて」の中の、恐慌理論にかんする周知の

箇処を引用して、レーニンの見地にしたがって過少消費説の『批判』を述べられたのち、藤塚氏は、つぎのように『結論』を与えていられる。

「過少消費説の批判さるべき点は、生産と消費との矛盾をもち出すこと自身にあるのではなく、これが生産過程分析を欠いており、史的唯物論の観点を完全に欠いている点にあるのであって、ここにこそ重点がおかれるべきである」（前出、二八ページ、傍点―藤塚氏）。

過少消費説の誤謬は、「生産と消費の矛盾」によって恐慌を説明することにある、と、レーニンは述べている。過少消費説の誤謬は、「生産と消費との矛盾」を恐慌の説明に「もち出すこと自身にあるのではない」と、藤塚氏は主張される。過少消費説の誤謬は、現象の根源を生産の外に見ていることにある、と、レーニンは述べている。過少消費説の誤謬は、それが「生産過程分析を欠いている点にある」と、藤塚氏は主張される、この場合、レーニンのいう「生産」とは、「生産の諸条件」であり、それを見失っては「社会的生産」も「私的領有」もまったくとらえることのできないものである（この点については、すでに述べた。本稿五八ページ参照）、ところが、藤塚氏のいう『生産過程の分析』とは、例の『最深の基礎』、『相対的剰余価値の生産を核心とするその最深の基礎分析』でしかない。レーニンの「生産」と、藤塚氏の『生産過程分析』との間の差違は、まさに「天と地」ほどのものである。また、ここに藤塚氏は、『過少消費説の批判されるべき点』として、「それが史的唯物論の観点を完全に欠いている点にある。」と附け足して論じていられるが、この種の『附け足し』は、まったく駄足というべきである。シスモンディ＝ナロードニキ流の理論が、総じて「史的唯物論の観点を完全に欠いている」ことはすでに明らかであり、この「欠いている」という事実をたんに指摘しただけでは、かれらの誤まった理論の批判にはならない。とくに、問題が、「過少消費説」の批判という点にかかっている場合、

それが「史的唯物論の観点を完全に欠いている点」をとくに指摘したとて、真の「批判」とはとうていなりうるものではない。もし、この点を固執するのであれば、むしろ、何故に「史的唯物論の観点の欠除」が、誤まった「過少消費説」を必然的に生み出したかということの「説明」をこそ、最初に与えるべきなのである。かくしてこそ、はじめて「史的唯物論との関連に視点をおいて」（注意せよ、これは、藤塚氏の論文の副題である！）という論者の見地が貫ぬかれるのである。「史的唯物論との関連」を示すことをなくして、『史的唯物論の視点の完全な欠除』ということだけで『批判』を突如として『結論』づけるのは、まことに誤まった『論理』的操作というべきである。（註）

（註）藤塚氏は、右の言葉について、つぎのような註記をこころみていられる。

「「基本的矛盾」からいかにして恐慌の論理（!?）を展開すべきかは、恐慌論上の大きな課題であるが、この問題は別稿において取扱うことにしたい」（前出、二八ページ、傍点および（!?）―山本）。藤塚氏にあっては、問題はあくまで、恐慌の論理であって、恐慌の理論ではない。ところで、藤塚氏による『恐慌の論理』の『展開』については、われわれは、幸か不幸か、すでに過去においてその『手本』を与えられている。さきに挙げた藤塚氏の論文、「恐慌論と利潤率低下法則」（「経済研究」第三巻第一号所収）がそれである。この論文のなかには、つぎのような『論理』が見出される。

「現実的恐慌の発現は、直接的生産過程と流通過程との統一として全一体として考察された資本の現実的運動を分析する資本論第三巻において展開されるのである」（前出、三六ページ）。

「資本論第三巻はかくて現実的恐慌（勿論これは直接的具体的な恐慌ではなく、むしろ恐慌の必然性というべきものである）の論理の展開を含むのであって、「利潤率低下法則」は、このような論理構造の上でのみ理解さるべきものである」（前出、三七ページ）。

「かくしてわれわれは最後に恐慌を説明すべき「人口過剰のもとにおける資本過剰」（十五章三節）に到達する。ここに資本過剰とは資本の増大が剰余価値量（従って利潤量）の増大を伴い得ない場合を指すのであるが、このことは、資本によって生産された社会的価値が、実現の規模の（即ち「社会的慾望」の規模の）狭隘性の故に、この狭隘な基礎によって規定される

社会的価値をしか代表し得ないこと、それを超過する価値は、社会的に浪費されたものとして切り捨てられざるを得ないこと、それ故にそれは商品の過剰生産を含んでいること、を理解せずしては解明され得ないのである」（前出、四〇ページ）。

レーニンにあっては、恐慌を説明するものは、「資本主義の基本的矛盾」である。藤塚氏にあっては、「恐慌の必然性」および「恐慌」そのものを「説明」するものは、「利潤率低下法則」であり、とりわけ、その中の「人口過剰のもとにおける資本過剰」である。このような、藤塚氏の『全論理』なるものは、宇野弘蔵氏の恐慌論が同じく「利潤率低下法則」、同じくその「人口過剰のもとにおける資本過剰」をもってその『核心』となしているという事実を「理解せずしては解明され得ないものである」。すでに見たごとく、宇野氏にあっては、「恐慌の必然性」は「基本的矛盾」の介在なしに『論証』されているのである。藤塚氏が、来るべき『別稿』において、「基本的矛盾からいかにして恐慌の論理を展開」するか、いいかえれば、「いかにして宇野氏の恐慌論を『批判』し、あるいは『止揚』し、または『折衷』する」かは、けだし、括目してまつべきものがあるであろう。

なお、ついでながら、右に引用した藤塚氏の論稿の最後の一節の中の、「資本によって生産された社会的価値が、実現の規模の狭隘性の故に、この狭隘な基礎によって規定される社会的価値をしか代表し得ないこと、それを超過する価値は、社会的に浪費されたものとして切り捨てられざるを得ないこと、それ故にそれは商品の過剰生産を含んでいること」という言葉は、簡単に見過されないものを含んでいるようである。「社会的慾望の規模によって規定される社会的価値をしか代表し得ない」ということは、要するに、社会的需要量に比して供給量の多いために、市場価格が市場価値を下廻るということにすぎない。それは、供給量（生産量）が需要量（社会的慾望量）を超過するという意味で「過剰生産」にはちがいないが、けっして恐慌をもたらす「一般的過剰生産」ということではない。「それを超過する価値は、社会的に消費されたものとして切り捨てられざるを得ない」というのは、――市場価格の低落によって、市場価値の一部分が実現されないという意味でならば、誤まりないが――『社会的価値』そのものが低下ないしは縮少するという意味で述べられているのであれば、完全な謬論といわざるをえない。要するに、このような、簡単な市場価値と市場価格との関係の問題では、恐慌はどうしても「解明され得ない」のである。

以上、「資本主義の基本的矛盾」についての藤塚氏の『説明』を考察してきたところをあらためて「要約」すれば、

つぎのごとく云うことができるであろう。

㈠ 藤塚氏は、『社会的生産』と『直接に結びつく最重要部分』として、『最深の基礎』＝『相対的剰余価値の生産』を念頭におき、この両者の『並置』ないしは『対応関係』という点に、『基本的矛盾』の『内容』の『説明』を見出すことに努められたようである。

㈡ そのために、「反デューリング論」を一応『論拠』とされつつも、結局、「生産の社会的性質」および「領有の私的性質」についての、立ちいった究明をおこなうことができず、たんに、若干の「形容句」を附した『定式化』にとどまらざるをえなかった。

㈢ それゆえ、「基本的矛盾」の内容を理論的に検討しなおすことが絶対に必要であり、「生産の社会的性質」とは何か、「領有の私的性質」とは何か、ということをできるかぎり正確にとらえることがなされなければならない。

㈣ そのさい、深甚の注意が払われなければならないのは、「**生産**」という言葉の内容と、「**矛盾**」という言葉の意味である。

右のごとき、簡単な「要約」または、「結論」を一応提示することをもって、藤塚氏の所論についての検討を終ることとし、つぎに右の「結論」にしたがって、「資本主義の基本的矛盾」の内容にかんするわれわれ自身の考察に移ることにしよう。「基本的矛盾」の内容については、やはり、エンゲルスの「反デューリング論」の中の当該箇処を参照する必要があるので、われわれもまた、藤塚氏にならって、エンゲルスの説明を引くことにするが、しかし、藤塚氏の場合のようにエンゲルスの説明を簡単に『要約』することなく、関係箇処を一応、原形のままで、掲げることとした。不用意な『論理的要約』は、えてして「理論」的誤謬を結果するからである。「基本的矛盾」の内容について

のわれわれ自身の考察の順序は、まず、エンゲルスの説明の引用ののちに、エンゲルスの説明にしたがっての「生産の社会的性質」の内容の考察にはじまり、「領有の私的性質」および「資本主義的領有」の内容の検討、さらに、「基本的矛盾」そのものの意義についての分析にうつり、最後に、「結び」において「資本論」における説明との対比をこころみたのちに、それまでの「基本的矛盾」にかんする考察を簡単に総括する、ということにした。したがって、第三節にかぎり、説明の便宜上、小節を設けてそれぞれ相当する表題を附けることにしたのである。

（一九五四・一〇・二〇）